

大鰐町におけるリゾート開発

—スキー場とその周辺地区を中心として—

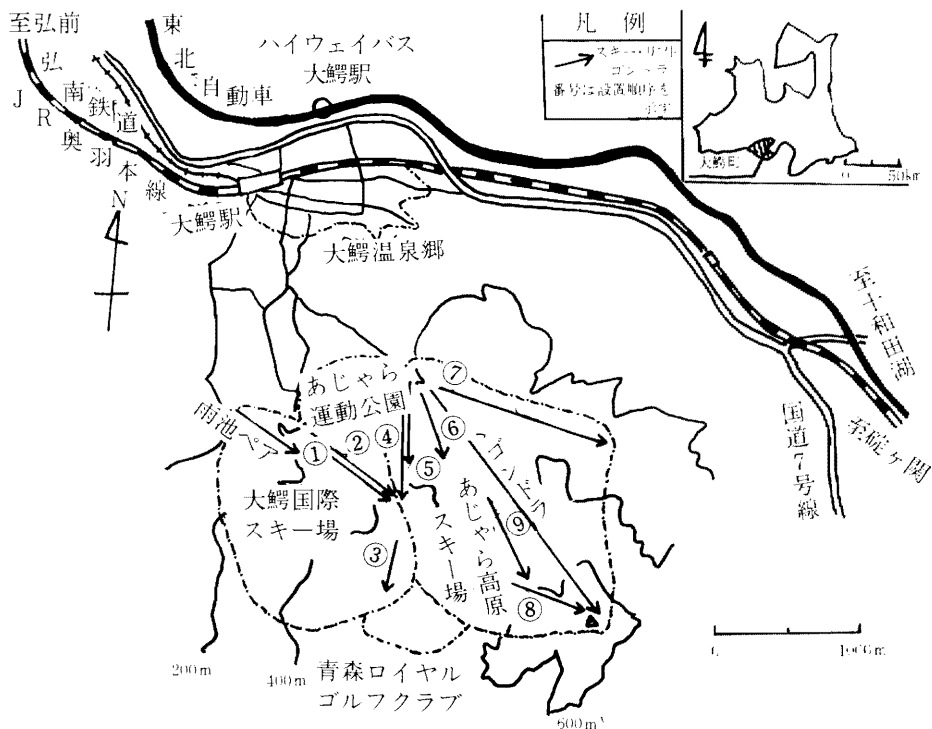
相 馬 克 典

I は じ め に

今日、我が国においては、リゾート開発が地方活性化の一方策としてブームの様相すら呈しながら、全国的規模で進められている。

そこで、本研究では、地域活性化の一方策として通年滞在型のリゾート地づくりを進めている、青森県南津軽郡大鰐町を研究対象地域として選定し、ここで行われているリゾート開発の分析と、それに対する提言を試みることを目的とする。

研究方法は、公共機関の資料の分析、筆者の作成したアンケートによる調査を主とした。アンケート調査は、スキー・シーズン前の平成2年11月下旬から12月上旬にかけて、弘前市内の3つの小学校の児童の両親と弘前大学の学生を対象に行い、そこで回収された有効回答 441名（社会



第1図. 研究対象地域

人 229名、大学生 212名）の結果を利用した。

II 大鰐町の概観

大鰐町は、三方を山に囲まれ、平地は岩木川支流の平川など3河川の流域に分布するだけである。人口は15,000人弱（平成2年）で近年、減少・高齢化が進んでいる。町の産業は、農業と観光業の2本柱である。

大鰐町は、「いでゆとスキーのふるさと」として親しまれ、昭和28年に県立自然公園、昭和46年には国民休養地の指定を、それぞれ受けている。また、昭和49年からは従来のスキー場を中心とした冬季依存型を改善すべく、あじやら運動公園整備事業を開始し、近年は通年型観光地へと変化している。そして、平成2年には、大鰐温泉郷地区を重点整備地区に含む、津軽・岩木リゾート構想が、リゾート法の指定を受けるに至った。

大鰐町の交通条件だが、JR奥羽本線、私鉄弘南鉄道大鰐線（弘前～大鰐間）、国道7号線、東北自動車道、新幹線と接続する高速バス「ヨーデル号」など、多様な交通網が整備されている（第1図）。

III 大鰐温泉スキー場を中心にみた大鰐町の観光開発過程

大鰐温泉スキー場は、標高709mの阿闍羅山^{あじろやま}にひらけた県内最大規模のスキー場で、滑走期間が110日間、年平均積雪量は100cmである。八木ら（1990）のスキー場の分類によると、大鰐は、温泉裏山型スキー場と位置づけられる。

大鰐温泉スキー場が、本格的に営業を始めたのは昭和29年からで、それ以降の開発を、その主体の変化に着目して概観すると、3つの時期に区分され、それぞれの特徴がわかる。

1）第Ⅰ期（昭和29年～55年）

昭和29年、大鰐町によりスキー場の営業が開始され、スキー場を中心とした、冬季卓越型観光地として開発が進められていった。

2）第Ⅱ期（昭和56年～61年）

昭和56年になると、大鰐町が100%出資して組織された、財団法人大鰐町開発公社が、第1スキー場（現大鰐国際スキー場）とあじやら運動公園各施設の運営・管理を町から委託された。この後、通年型観光地を目指し、あじやら運動公園の各施設の整備が進められた。

3）第Ⅲ期（昭和62年～）

昭和62年になると、大鰐町および、共に本社を東京にもつ、藤田観光株式会社とタウン開発株式会社等からなる、第3セクター方式の株式会社大鰐地域総合開発が発足し、あじやら高原スキー場の整備をはじめ、リゾートホテル、温泉施設などを建設した。また、大鰐町開発公社も大鰐

国際スキー場を整備し、本社を大阪にもつ、株式会社ニチゴもりゾートホテルとゴルフ場を滝の沢地区にオープンさせた。このように第Ⅲ期は、第3セクターを中心にし、通年滞在型の総合リゾート地を目指して開発が進められている。

Ⅳ 観光地としての大鰐町の現状

1) 宿泊施設

大鰐町には、平成2年現在、ホテル6軒、旅館12軒、民宿・ペンション14軒、客舎8軒、保養所2軒の計42軒（総収容人員 2,000人余）の宿泊施設が営業している。このうち、25軒が駅周辺に集中し、13軒がスキー場内に立地しているが、近年は町外資本によるリゾートホテルが、スキー場内で営業を行っている。

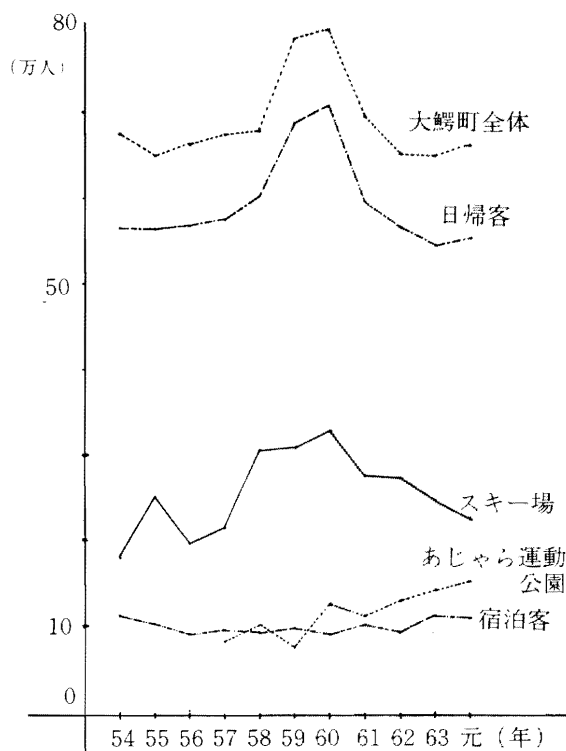
2) 入込客の分析

第2図と筆者の調査を総合すると、大鰐町全体の入込客の中心は、スキー場利用の日帰客であると考えられる。また、宿泊客は、スキー客、弘前・十和田湖見物客・忘年会客が中心であり、その誘致圏も、町外資本の本社のある東京・大阪からの宿泊客が増加したため拡大している。しかし、交通環境の改善等により、地元客が流出しているため、第2図に示されている通り、年間総宿泊者数は、ここ10年間、停滞が続いている。

3) 観光・レクリエーション施設等の入込状況

大鰐町内の観光・レクリエーション施設等（スキー場は除く）の平成元年の総入込客数は、27万人余で増加傾向にある。

筆者の行ったアンケート調査の結果（第3図）によって、各施設ごとの利用状況をみでみる。大鰐町には、人数や年齢を限定してしまうスポーツ系の施設が多いが、家族や少人数でも楽しめる施設が、高い利用頻度を示している。このことから、今後、人数や年齢、滞在日数などを限定しない施設の整備が望まれる。



第2図. 大鰐町客入込推移

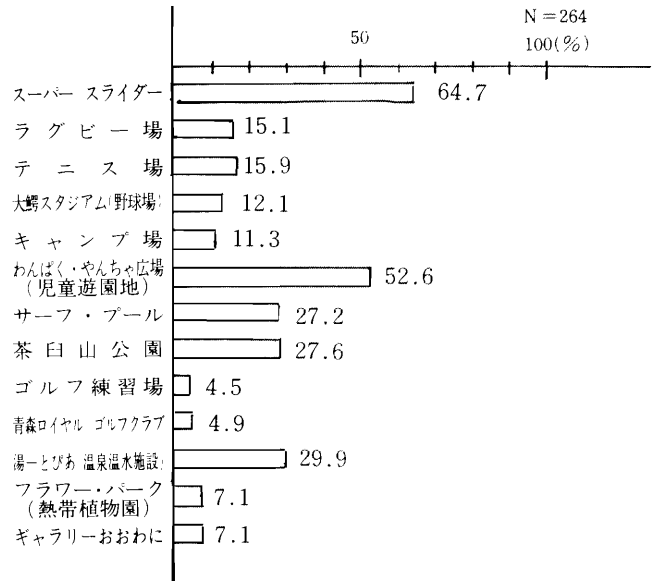
〔大鰐町観光企業課「大鰐温泉観光統計」より作成〕

4) 大鰐温泉スキー場利用客の分析

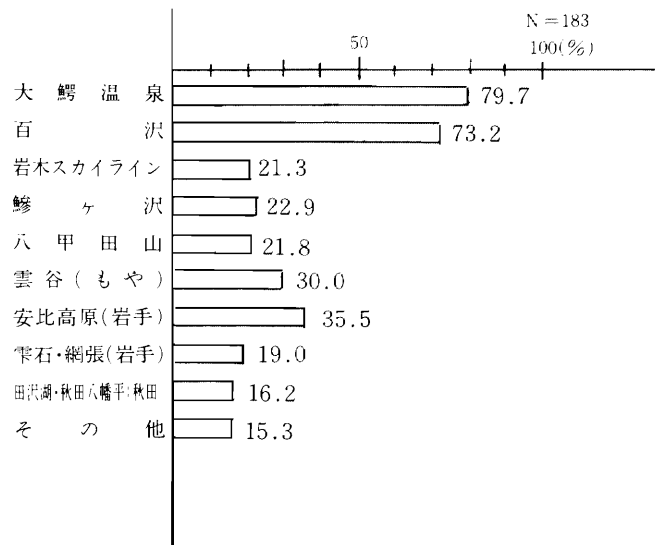
大鰐温泉スキー場利用客は、第2図のように、昭和60年に最高値を示した。これは、ナイター設備の導入と東北自動車道青森～大鰐間開通による誘致圏の拡大が原因であると考えられる。また、昭和61年以降の減少は、暖冬消雪によるリフト稼働日数の減少と、東北自動車道全線開通によるスキー客の岩手方面への流出によるものと思われる（第4図）。

次に、利用客の質的構造を分析する。まず、滞在日数についてだが、大鰐町では、1、2月に日帰客が卓越するため、利用客の中心は、日帰客であると考えられる。これから、誘致圏も弘前市を中心とした津軽地方であると考えられる。スキー場までの利用交通機関は、筆者のアンケート調査によると、自家用車とした人が大半を占めた。

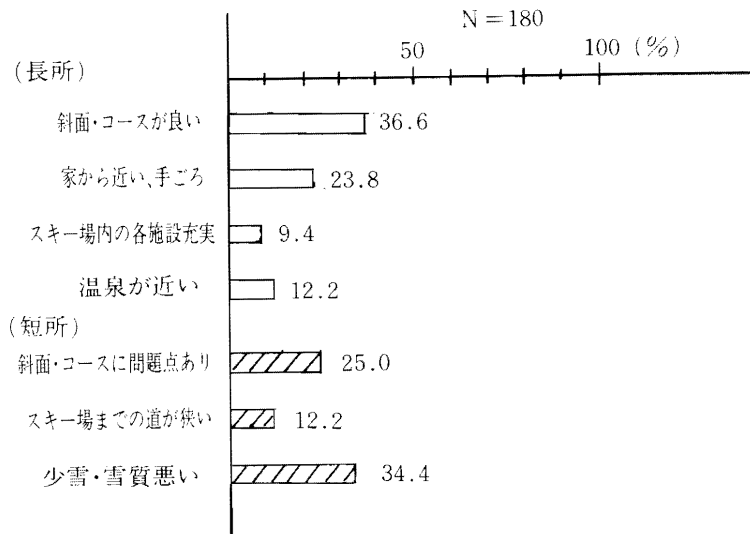
また、大鰐温泉スキー場の長所と短所を、アンケートにより調査した結果が第5図である。短所の雪が少ないという点は、昨年12月からの人工降雪機の搬入により、また、道が狭いという点は、国道7号線からあじやら高原スキー場への直通道路の工事が、平成5年開通を目標として続けられていることから、それぞれ改善される見込みである。



第3図. 大鰐町内の施設等の入込状況
〔筆者のアンケート調査による〕



第4図. 青森県人の主要スキー場の利用状況
〔筆者のアンケート調査による〕



第5図. 大鰐温泉スキー場の長所と短所〔筆者のアンケート調査による〕

5) 大鰐町における観光業の影響

まず、大鰐町の産業別人口構成（昭和60年）をみると、サービス業従事者の総就業者数に占める割合は、17.5%と観光地特有の高い数値を示す。しかし、総就業者数は、観光・レクリエーション施設の拡充がみられた、昭和55年～60年の間に約400人減少している。このため、雇用の場の確保にはうまくつながっていないと思われる。

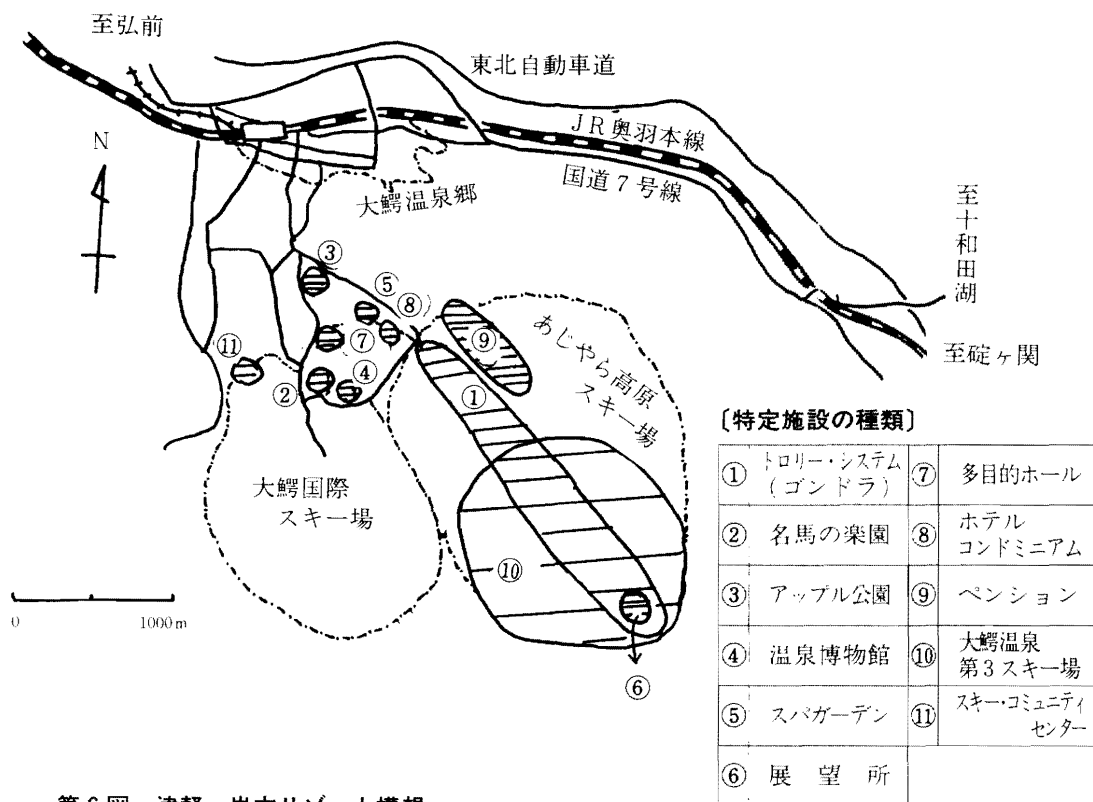
次に、経済的側面からみてみると、平成元年の大鰐町の総観光消費額は、約18億円で、これは同年の町の当初予算の1/3にあたった。

このように、経済的には、大きな役割を果たしている観光業も、社会的には十分な働きをしているとはいえず、今後、リゾート開発の最大の目的である、第3次産業を核とした地域活性化が図られねばならないだろう。

V 今後の開発計画

今後、大鰐町のリゾート開発は、第3セクターにより、津軽・岩木リゾート構想の「大鰐温泉郷地区整備計画」に沿って行われる。その概要が第6図で、「あじらスポーツ高原」というテーマで各施設が整備される。

現在の計画では、リゾート地として、大鰐町固有の施設の建設ばかりが目立つが、長期滞在客が生活していく上で、必要最低限の生活基盤、社会資本の整備、リゾート地というイメージにふさわしい景観づくりなどが必要であると考えられる。



第6図. 津軽・岩木リゾート構想
大鰐温泉郷地区内の特定施設の配置図
〔青森県「地域開発環境配慮方針」より作成〕

VI ま と め

大鰐町で、第3セクターを中心に進められているリゾート開発について分析してきたが、その結果、明らかになったことは、次のようにまとめられる。

- 1) 昭和29年以降の開発過程を、開発主体の変化から考えると、3つの時期に区分できる。
- 2) 入込客の中心は、スキー場利用の日帰客であるが、暖冬少雪と県内及び岩手方面へのスキー客の流出により、年間総入込客数は減少傾向にある。
- 3) 宿泊客の誘致圏は、東京・大阪から宿泊客が増加したため拡大したが、地元客が減少しているため、宿泊者数は停滞を続けている。
- 4) 観光業は、経済的には大きな役割を果たしているが、社会的側面（特に雇用の場の確保）では、有機的な働きをしていない。
- 5) 今後の開発は、第3セクターを中心に「大鰐温泉郷地区整備計画」に沿って行われる。

以上、5点であるが、これらについて筆者は、以下の2点の提言を行う。

①今後のリゾート開発は、大鰐町固有の魅力的な施設と景観づくり、リゾート地として最低限必要な共通的基盤施設の整備の3本柱で行われることが望まれる。

②今後の傾向として、県内及び岩手方面のスキー場との競合が進むと考えられるので、地元客よりも宿泊客の誘致が重要となる。その際の受け入れ体勢の強化（PR方法、バック・ツアーの企画、周遊ルートの設定、共通チケットの販売等）を、大鰐町単独ではなく、津軽・岩木リゾート地域単位で行なうことが望まれる。

本稿を草するにあたり、多くの御指導をいただいた水野先生、後藤先生と、資料収集に御協力いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

【参 考 文 献】

- 伊藤達雄（1989）：リゾート時代の課題と展望 地理, 34-2, 13~18
- 今野修平（1989）：先進国のリゾートに学ぶ 地理, 34-2, 35~40
- 坂中正人（1987）：温泉観光地大鰐の地理学的研究 弘大地理, 23, 13~20
- 白坂 蕃（1982）：中央高地柵池高原における新しいスキー集落の形成 地理評, 55-8, 566~586
- 溝尾良隆（1989）：余暇時代の幕開け 地理, 34-2, 19~23
- 八木ほか（1990）：東北地方におけるスキー場の立地展開（発表要旨） 東北地理, 42-3, 208
- 山村順次・浅香幸雄共編（1974）：「観光地理学」 大明堂, 234ページ